Aropa
アゴラ
鶴見大学図書館報

アゴラ　ー鶴見大学図書館報ー
第 144 号　2015 年 3 月 13 日発行
編集・発行 鶴見大学図書館
〒230-8501　横浜市鶴見区鶴見 2-1-3
http://library.tsurumi-u.ac.jp/library/

挿絵の世界—ミルトンとキャロル
学生たちによる展示と解題６

2015 年１月、図書館 1 階の展示スペースにおいて、書誌学特殊２を受講した学生たちは、鶴見大学図書館収蔵の貴重書と準貴重書より、標記のタイトルで調査研究した成果を展示しました。本号は展示目録をもとに構成したものです。

目次

言葉を超えて—表紙と挿絵と　書誌学特殊２担当 池田 早苗　p. 1
ジョン・ミルトン『失楽園』第４版—挿絵と版権　科目等履修生 小島 啓一　p. 4
不思議の国との違い—*The Nursery Alice*（『子供部屋のアリス』）　３年 森 春奈　p. 6
翻訳本アリスの服装や登場人物、言葉の変化について　３年 中嶋 柚佳子　p. 8
挿絵の比較に見る共通点と変化—シュヴァンクマイエルとテニエル　４年 内田 まどか　p. 10

言葉を超えて—表紙と挿絵と

書誌学特殊２担当　池田早苗

> ある同じ作品に、表紙のデザイナーたちはこれまでどの様に取り組んできたのか。表紙の歴史は、デザインの歴史であると共に、その作品がどう読まれまたその作品にどんな期待が寄せられたのかを示すものでもある[1]。 ディヴィッド・ピアソン

西洋の書物をふり返ると、同じ作品のテクストが、さまざまな大きさ、厚さ、表紙、書体で作られ、挿絵などの装飾も異なって、私たちの前に登場している。お気に入りの本が、ある日、全く違った画風の画家によって描かれた挿絵と共に置かれていると、その本とは気づかないことすらある。今回の、書誌学特殊 2 を受講した学生たちによる展示では、鶴見大学図書館貴重書室・準貴重書室に収蔵された書物の中から、2 つの作品を選んで、そうした視点から本を並べて比較することにした。一つ目の作品は、英国の誇る詩人、ジョン・ミルトン（1608-74）による『失楽園』、二つ目は、今もなお、多くの芸術家たちに刺激を与えているという、ルイス・キャロル（1832-98）による『不思議の国のアリス』である。そのオリジナル版をじっくりと見るところから始まる。その版が読まれ次の版の出版を促したのか、やがて挿絵のついた版が出版され、表紙、テクストのレイアウトと装飾が工夫される。そして次第に何人もの画家によって挿絵が描かれ出版されていく。こうした書物を並べ、年代や時代、また国を越えて、それらを追って見て行こう。

[1] ディヴィッド・ピアソン『本ーその歴史と未来』原田範行訳（ミュージアム図書、2011）p. 45

作品が出版に漕ぎつけた経緯も重要であろう。
ミルトンによる叙事詩『失楽園』（1664 年初版）は、彼の晩年の作品である。20 年に亘る失明と貧困の内に、口述筆記を家族らに委ねて書き上げた長編で、聖書の「創世記」を題材にして彼の主張を語る。ジョージ・サンプソンは、「ミルトンが言おうとしていることは、あらゆる人間の人生は、楽園を失い、楽園を求める者の物語だ、ということである。人間が自分自身を超えようと願い、われわれが公正、善、恩寵と呼んでいる偉大な理想の真実性を信じている限りにおいてのみ、人間の妥当な存在は可能なのだ[2]」と述べている。6 年という月日を掛けて書き上げた詩の出版権を、ミルトンは、サミュエル・シモンズに 5 ポンドで売り、シモンズは、1667 年夏に初版 1500 部を出版したが、18 ヶ月で完売したという。1674 年のミルトン逝去後、シモンズは権利を売却した。ジェイコブ・トンソンは 1688 年に権利を取得すると、ケンブリッジ大学トリニティ・コレッジの学長、リチャード・ベントリーの助言を受けながら、ジョン・バプティスト・メディーナらの画家に依頼した挿絵を各巻の口絵に配した第 4 版を制作し、1688 年に出版。1695 年には、パトリック・ヒュームによる詳細な注釈がつけられた版が出版され、ミルトンの叙事詩は、古典としての地位が揺るぎないものとなった。文字の形をとった（ミルトンの）想いは、書物として生き延びたと言えるのではないだろうか。

一方、キャロルの『不思議の国のアリス』（1865 年初版）は、オクスフォード大学の数学の教師であったチャールズ・ドジスン（ルイス・キャロルは彼のペンネーム）が、新しく赴任してきた学長の三人の幼い娘たちにせがまれ、ボート遊びに出掛けた時にしたお話しを、その後、その三姉妹のひとり、アリス・リデルに頼まれて手書きでお話しと挿絵、それにお手製の表紙まで付けてクリスマス・プレゼントをしたことにはじまる。いまでは世界中で約 100 の言語に翻訳され、150 人以上のアーティストから挿絵などを描かれた作品につながっている。この間の紆余曲折は、この冊子の後半の学生達のエッセイで語られているので、ぜひご一読下さい。

そうした経緯を思い描いてでも、またそうでなくても、「作品を読みながら読者が想像するアリスの姿はどんなものなのか、あるいはまた表紙の絵は、読者の想像にどんな影響を与えるのか？アリスは、きゃしゃでか弱い無垢な子供だったのだろうか？それとも、人をからかうのが好きなおてんばだったのか？[3]」と、冒頭のことばに続けてピアソンは問う。本はテクストなしには存在しない（たとえ eBook であっても）。しかしながら、本を形作る様々な要素—そのひとつである挿絵、表紙、色、装飾、レイアウト、文字の形など—もまた、その本の歴史を共に歩むものであろう。どう読まれ、どのような期待がよせられたのか。

展示リスト

【失楽園】

１．ジョン・ミルトン『失楽園』　1669 年出版

John Milton, *Paradise Lost: A Poem in Ten Books*（London: Simmons, 1669）

２．ミルトン『失楽園』　第 4 版 1688 年出版、最初の挿絵版

John Milton, *Paradise Lost*, 4th ed., adorn'd with sculptures [by R. White and M. Burgesse] (London: Printed by M. Flesher for J. Tonson, 1688)

---

[2] ジョージ・サンプソン『ケンブリッジ版イギリス文学史』平井正穂監訳、第２巻、４版（東京：研究社、1981）p. 42
[3] ピアソン、p. 45

３．ミルトン『失楽園』　ジョン・マーティンの挿絵の２巻本のうち第１巻。1827 年版
The Paradise Lost, Milton, with illustrations, designed and engraved by John Martin [Large edition] (London: S. Prowett, 1827)
４．ミルトンの『失楽園』　ギュスタヴ・ドレの挿絵、[1888 年?] 版
Milton's *Paradise Lost*, illustrated by Gustave Dore; edited, with notes and a life of Milton, by Robert Vaughan, with fore-edge painting (London: Cassell, Petter, & Galpin, [1888?])
５．ミルトン『失楽園』　ダブス・プレス版　1902 年版
Paradise Lost: A poem in XII books the author, by John Milton (Hammersmith: Doves Press, 1902)

【不思議の国のアリス】
１．ルイス・キャロル『不思議の国のアリス』1869 年版、アメリカで出版
Lewis Carroll, *Alice's Adventures in Wonderland* (Boston: Lee and Shepard, 1869)
２．キャロル自身による手書き本（1864 年）をファクシミリ版にして 1886 年に出版
——, *Alice's Adventures under Ground*, a facsimile of the original MS book, with 37 illustrations by the authors (London: Macmillan, 1886)
３．キャロル『子供部屋のアリス』（ロンドン・マクミラン社、1890 年）
挿絵画家テニエルが原書から 20 点の挿絵を選び彩色。小さな子ども向けに出版
The Nursery 'Alice': Containing Twenty Coloured Enlargements from Tenniel's Illustrations, by Lewis Carroll, the cover designed and coloured by E. Gertrude Thomson (London: Macmillan, 1890)
４．キャロル『不思議の国のアリス』と『鏡の国のアリス』ジョン・テニエル画、1911 年
Lewis Carroll, *Alice's Adventures in Wonderland, Through the Looking-glass and What Alice Found There*, with ninety-two illus. by John Tenniel (London: Macmillan, 1911)
５．邦訳の初期作品
ルイス・キャロル『アリスの不思議国めぐり』望月幸三訳（東京：紅玉堂書店、1923）
６．——, 『アリス物語』菊池寛、芥川龍之介共譯、小學生全集 第 28 巻（東京：興文社、文藝春秋社、1927）
７．　アリスの 2 作品を 1 冊にした本格的な邦訳本。初版は 1920 年で、その後版。
——, 『アリスの夢』楠山正雄訳、世界家庭文学全集 7（東京：平凡社、1930）
８．タイトルがこの本から『不思議（の）國のアリス』となった。1930 年
——, 『不思議國のアリス』長澤才助譯註、英文名作文庫 第 2 輯 第 11 巻（東京：英文学社,1930）
９．キャロル『不思議の国のアリス』と『鏡の国のアリス』テニエル画、1927 年
Lewis Carroll, *Alice's Adventures in Wonderland, Through the Looking-glass and What Alice Found There*, with ninety-two illus. by John Tenniel (London: Macmillan, 1927)
10. ルイス・キャロル『不思議の国のアリス』久美里美訳　ヤン・シュヴァンクマイエル画
（東京・エスクァイアマガジンジャパン、2006）
11. キャロル『不思議の国のアリス』アーサー・ラッカム画、オースティン・ドブソン詩 [1907 年]
Lewis Carroll, *Alice's Adventures in Wonderlan*d, illustrated by Arthur Rackham, with poems by Austin Dobson, large paper ed. (London: W. Heinemann, [1907])
12. ルイス・キャロル『ふしぎの国のアリス』中村妙子訳、ヘレン・オクセンバリー画（東京・評論社、2000）

ミルトン『失楽園』第４版―挿絵と版権

John Milton, *Paradise Lost: A Poem in Twelve Books* (London: Flesher, 1688)

科目等履修生　小島啓一

『失楽園』第４版は、初版から 21 年、著者ジョン・ミルトンの没後 14 年に、ジェイコブ・トンソンによって出版された。この版で初めて、各巻にフォリオ版 1 枚分の銅版画の口絵が付けられた。書物にとってこれは大きな変更である。しかも著者の没後にこうした変更が行われている。そこで私は、こうした変更がどのような経過で加えられたのか、またなぜ可能であったかを、口絵の分析を中心にしながら、それに係わる出版権という視点も見ながら、17 世紀英国の書物における挿絵を論じたい。なお、本稿で「巻」と述べているのは、本書の Book 1-12 という区分に応じて、第１-１２巻としている。

本書の口絵は、次の画家たちによって描かれている。すなわち、第 3、5－11 巻の口絵は、ジョン・バプティスト・メディーナが描き、マイケル・バーガーズが彫版した。第 4 巻は、バーナード・レンズ Ⅱ(1659-1725)が描き、アントワープのペーター・パウル・ボウヘが彫版した。第 1、2、12 巻については、ヘンリー・アルドリッチが自己の所蔵する版画から参考になるものを選び出し，バーガーズがそれによって彫版したと考えられている[1]。

メディーナはフラマン系スペイン人で、ブリュッセル生まれであった。その地で油絵の技法を学んだ。1686 年 27 才の時、ロンドンに渡った。ほどなくメディーナは『失楽園』の挿画に係わったが、それ以前挿絵の仕事をしたことが無かった。メディーナの画は、それぞれの巻の主題を中心に大きく配置し、そのほかは、焦点をずらして配置する画面で構成されていた[2]。それに比べてレンズの画は多くの出来事を、近景から遠景へ重ねて描く古い描写法で構成されていた[3]。サタンが楽園を見つめる場面、楽園の光景、アダムとイブが木陰で休んでいる光景、ウリエルが天国から降りてきて、ガブリエルにサタンを見つけるように指示する場面、サタンがガマに変装してイブの耳元に座り夢の中で誘惑している場面など、第 4 巻の内容を説明しているように見える。トンソンはメディーナを雇う前にバーガーズのすすめでレンズを雇ったが、この巻の口絵の出来を見てすぐに解雇してしまったという。

第１，２，１２巻の版には、バーガーズのサインしかなく画家の判定が出来なかったが、Suzanne Boorsch の研究によって、オックスフォード大学 Christ Church College のアルドリッチが係わっていたとされた。アルドリッチは、建築、音楽、論理学等の権威であった。またイタリアの版画や、フランス、イギリス、ドイツ、オランダなど 2,000 点あまりの版画を所蔵していた。アルドリッチは、所蔵している版画の中から、聖書に関するも

[1] 平田家就『イギリス挿絵史―活版印刷の導入から現在まで』（東京・研究社出版、1995）
[2] E. Hodonett. *Five Centuries of English Book Illustration* (Aldershot: Scolar Press, 1988) p. 63
[3] 平田、ｐ. 34

のや、イタリアの絵の版画からいくつかの部分を組み合わせ、バーガーズが 3 巻それぞれに挿絵を描き、彫版した。トンソンは最初にアルドリッチに、本書の挿絵を頼んだが、3 点しか完成できなかった。第 1 巻の口絵は、ラファエロの‘St. Michael and the Devil’ の油絵に影響を受けていると考えられていて[4]、第 2 巻は、アンドレ・マンテーニャの版画 ‘The Descent into Limbo’ の部分を使い[5]、第 12 巻は、ラファエロの「楽園追放」を、ニコラス・シャプロンが彫版した版画を使っている[6]。

これらの銅版画の挿絵を印刷するには、多くの費用がかかった。なぜならば銅版画の費用と共に、活字と別に印刷しなければならなかったからだ。小口木版など木版の挿絵であれば、活字とともに版木を組むため、一度の印刷で絵と文章が刷り上がり、費用が少なくて済むのだが銅版画は別に印刷する。そのためトンソンは、挿絵入り本の出版費用を賄うため、購入希望者から予約を取った。その人数は、その当時の有名な文学者や政治家を含めて、500 人あまりとなった[7]。第 4 版の部数は、約 500 になり、同じ挿絵による『失楽園』の出版は、第 5 版、（1692 年）、第 6 版（1695 年）と続いた。Sir Godfry Kneller によって 1717 年にトンソンの肖像画が描かれた。その手には『失楽園』第 4 版の本が抱えられていて、『失楽園』の出版の成功を物語っている。

第４版には、ほかにも大きな変化があった、出版者が、サミュエル・シモンズからトンソンに変わったことであった。シモンズは、クロムウエルの共和制時代、King's printer に指定されていた。クロムウエルのラテン語秘書官であったミルトンは、その頃から親交があり、いくつかの著作を刊行した。共和制の崩壊や、ミルトン自身の個人的な悲劇にあったが、かつての親交から詩集の原稿をシモンズに持ち込んだ。この時の印税の取り決めは、初版に 5 ポンド、再販するごとに 5 ポンドであった。詩人の没後 1680 年に、詩集の版権をトンソンが買い取るような形で遺族に 8 ポンド支払われた[8]。労せずしてトンソンは出版権を手に入れた。ミルトンのような大詩人でもようやく個人的契約にこぎつけたものの、手にした印税は僅かなものにすぎなかった[9]。

メディーナを中心とした銅版画を描く画家の存在、購入希望者から予約を取る出版方法、出版権の獲得が、この挿絵入り本の出版を可能にしたのだと思う。

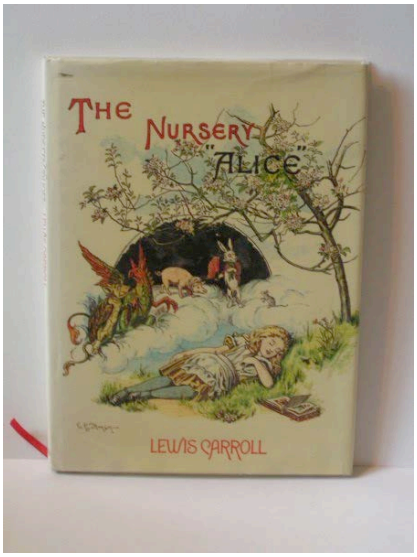
---

[4] Suzanne Boorsch. ‘The 1688 *Paradise Lost* and Dr. Aldrich’. *Metropolitan Museum* Journal 6 (1972)：149. <http: www.metmuseum.org/research/metpublications/The1688 *Paradise Lost* and Dr. Aldrich>. accessed on 20 Dec. 2014
[5] Boorsch, p. 135
[6] Boorsch, p.136
[7] Boorsch, p.133
[8] 出口保夫『イギリス文芸出版史』（東京・研究社出版、昭和 61） p. 26
[9] 出口、p. 66

不思議の国との違い－*The Nursery Alice*（『子供部屋のアリス』）

The Nursery "Alice": Containing Twenty Coloured Enlargements from Tenniel's Illustrations, by Lewis Carroll, the cover designed and coloured by E. Gertrude Thomson (London: Macmillan, 1890)

３年　森 春奈



The Nursery Alice は、1890 年にロンドンの Macmillan 社より出版され、翻訳本は『子供部屋のアリス』高橋康也、高橋進訳、(東京・新書館、1987 年)である。1865 年に出版されている *Alice's Adventures in Wonderland*（『不思議の国のアリス』）を、著者ルイス・キャロル自身が 5 歳以下の小さな子どもたちのために書きなおしたものだ。『不思議の国のアリス』は大人も楽しめるものになっているが、小さい子には難しいところもある。そこで物語の長さを 4 分の 1 にして、挿絵は色を付けて大きくしている。『不思議の国のアリス』でジョン・テニエルが描いた挿絵から 20 枚が選ばれ大きくなって彩色されたのだ。また初版では、本編の後にある「アリスが木の下で寝ている絵」（左図）や「兎の絵」はエミリー・ガートルード・トムソンが手掛けた。これらは第二版から、表紙と裏表紙として掲載されている。

本書は、小さい子が理解できない論理遊びや詩の替え歌を省くなどの一方、元の話にない話や挿絵について語り掛けの口調など工夫がなされている。そして遊び心も満載だ。その例を挙げよう。

１．本編の最初に出てくる挿絵、時計を気にする兎については「ピンク色の耳に素敵な茶色の上着、ポケットからの赤いハンカチ、青いネクタイ、黄色のチョッキ、兎さんなかなかおしゃれ。」といったように挿絵とも合わせて色にも触れて、より子どもたちの興味を引くようなものになっている。日本語訳は、『子供部屋のアリス』高橋康也、高橋迪訳（東京：新書館、2003）から引用（高橋、p.14）

> [. . .] pink ears; and a nice brown coat; and you can just see its red pocket-handkerchief peeping out of its coat-pocket: and, what with its blue neck-tie and its yellow waistcoat, it really is very nicely dressed.
>
> （*The Nursery Alice*, p.2）

２．公爵夫人のところへ急ぐが遅刻しそうな兎。彼女を怒らせるとどうなることかとおびえているシーンでは、兎がどんなに震えているかを伝えるために、「彼がどれくらい震えているか？本を振ってみるとあなたにも伝わります。」（高橋、p.15）と動作も一緒に伝

えて、なんとしても小さな子どもを喜ばせたいというキャロルの愉快さがあふれている。

Don't you see how he's trembling? Just shake the book a little, from side to side, and you'll soon see him tremble. （*The Nursery Alice*, p.2）

３． 帽子屋と三日月兎に会ったマッドパーティーではヤマネも合わせて 3 人いたが、「テーブルには 3 人だけしかいませんでしたが、お茶のカップはもっとたくさん並べてありました。テーブルは全部見えませんが、見えているだけでも 9 人分のカップがありますね、三日月ウサギの分も入れてです。」(高橋、p.71)と数を数える遊びにも手を貸している。

There were only those three at the table, but there were quantities of tea-cups set all along it. You can't see all the table, and even in the bit you can see there are nine cups, counting the one the March Hare has got in his hand. （*The Nursery Alice*, p.37）

4. 最後にはアリスみたいなおもしろい夢を見るにはどうすればよいかを提案して締めくくっている。「最適なプランを教えてあげます。まず、木の下で横になります。そして、手には時計を持った兎が通りかかるのを待ちます。それから目を閉じてあの可愛いアリスのふりをするのです。」(高橋、p.100)

The best plan is this. First lie down under a tree, and wait till a White Rabbit runs by, with a watch in his hand: then shut your eyes, and pretend to be dear little Alice dear, good-bye! （*The Nursery Alice*, p.56）

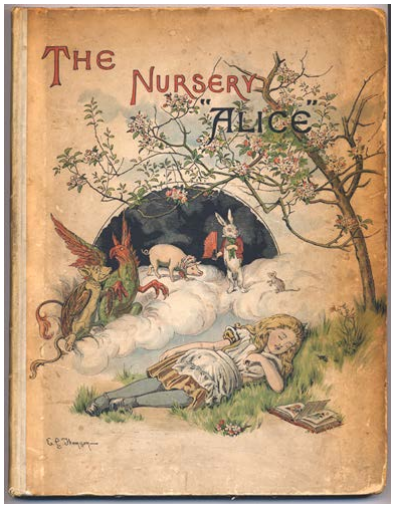
このように読者を参加させながらアリスの世界に入り込める話になっている。巻末には「AN EASTER GREETING」（イースターのあいさつ）「CHRISTMAS GREETINGS」（クリスマスのあいさつ）がありなかなかこのような形は見ないので面白い。また 2、3 ページの白紙も見られた。折りたたんで本を作るということだったのでこのような形になったようだ。他にも広告が 2 ページあり、本書の出版社 Macmillan から出しているキャロルの他の著書の紹介になっていた。英語だけでなくフランス語やイタリア語の訳書も載っている。また見本のページとして 1 ページに *Alice's Adventures in Wonderland*（London: Macmillan,1885）の基となった *Alice's Adventures under Ground*（London: Macmillan,1886）のアリスが青虫と会話をしてキノコを食べて体の大きさが変わってしまうところを読むことができる。

『不思議の国のアリス』では文字の置き方にも工夫があり、言葉遊びの楽しさを全面的に出している。有名な、上からジグザグに書かれた歌遊びの箇所も面白いが、小さな子供たちは絵本から話しかけられた方が、もっと興味をひきつけられるだろう。元々あるものの世界を壊さずに短くまとめあげ、違う楽しさを盛り込んだ *The Nursery Alice*『子供部屋のアリス』は、子どもたちの空想の力を深めてくれることだろう。

アリスの服装や登場人物、言葉の変化について
『アリス物語』菊池寛、芥川龍之介共譯、小學生全集第 28 巻
（東京・興文社、文藝春秋社、1927）

3 年　中嶋柚佳子

原作品が日本で初訳されたのは、須磨子(永代静雄)訳の『アリス物語』で、1908 年から翌年にかけて『少女の友』という雑誌に掲載されたものである。その後、楠山正雄が、『不思議の国のアリス』と『鏡の国のアリス』を併せた本格的な訳である『不思議の國』(1920)を出版してから『アリス』の翻訳本が盛んに出版されるようになった。この『アリス物語』は、その時期の翻訳書の一冊である。本書で一番目につき気になったのは、口絵の少女である。黄色の帽子に黄色のワンピース、さらに緑の靴下を履いた金色の短い髪の毛の少女が両手を上げている。1890 年に出版された *The Nursery "Alice"*でも同じように黄色いワンピースを身にまとっている。しかし、2010 年に出版されたウォルト・ディズニー版『ふしぎの国のアリス』の少女は、この口絵の少女とは似ても似つかない青いワンピースに白いエプロン、白い靴下に金色の長髪である。ディズニー版では絵本やアニメーション、テーマパークでもアリスの存在を示しているため、青いワンピースに白いエプロン、白い靴下に金色の長髪のアリスが一般的には多くイメージされると思う。



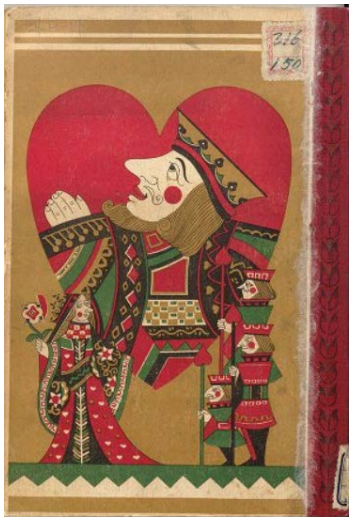
『アリスとテニエル』（M.ハンチャー著、石毛雅章訳、東京図書）の中で「テニエルの死ぬ 3 年前の 1911 年に、ロンドンのマクミラン社は、テニエルの挿絵 16 点を全ページ大の図版に描き直して彩色したものを含む両『アリス』本の合本を刊行した。[中略] たとえば、グリフォンは 1890 年版では緑と赤であったが 1911 年版では紫と赤、そして茶色になっている。アリスのドレスは黄色から青みがかったスミレ色に変わっている。」(ハンチャー、pp. 260-261)と書かれている。よって、現在のアリスの服装は、この 1911 年版を発端にイメージづけられたものだとわかる。つまり、『アリス物語』では、英語版はスミレ色

の服に変わりつつもまだ、服の色の定着はしておらず、黄色の路線を選んだのだと考える。

一方で、『アリス物語』の「挿絵」の方では、口絵のアリスとは異なって髪の長い少女が描かれている。髪が長いという点では現代のアリスに近い表現だ。全ページ白黒のため、髪色やワンピースの色まではわからない。しかし、口絵は海野精光、挿絵は平澤文吉が担当しており、お互いアリスのイメージ像に違いがあったため、口絵と挿絵で描かれ方が異なったのではないかと考える。どちらも個性があり、２人のアリスを楽しめるため、『アリス物語』は貴重な本だと改めて思う。

さらに、本書には、チェシャ猫や帽子屋、トランプの姿は描かれていない。見返しにはトランプの姿はないが、帽子屋、チェシャ猫は描かれている。見返しはシルエットで描かれ、抽象的で表情も服装も読み取りにくい。読者としてはより具体的に本の内容をイメージしながら読みたいと思う。原作では帽子屋は描かれていて欠かせないキャラクターであるので、本書に登場しないのには違和感を感じる。

本書 217 ページに書かれている、11 章の「誰がお饅頭を盗んだか」という話では、ハートの女王様が作ったお饅頭が盗まれてしまう。ここでいうハートの女王様は、下に掲載した画像の左側の表紙に写るハート模様の洋服を着た女性だと考える。唯一ハートの女王らしい上品な恰好であり女王らしさが出ているからだ。では、その章で私が注目したのはお饅頭というところである。原作でも同じ内容の話があり、そこではお饅頭ではなくタルトとして書かれている。しかし、本作ではそこがお饅頭と訳された。なぜ訳したままタルトにせずお饅頭にしたのか。私は、タルトという食べ物がこの時代、日本ではまだあまり定着していなかったため、当時の子供にわかりやすく身近に感じてもらえるようにお饅頭という表現を選んだのではないかと推測する。アリス自体洋風に描かれているがお饅頭を登場させるのは実に日本らしく和を大切にしている様子が窺えるため気に入っている。



日本人にルイス・キャロルの世界観や不思議の国のアリスの面白さを伝えるため、より身近なものに置き換えたり、想像を膨らませる工夫をしたりしたのではないかと考えた。

『不思議の国のアリス』挿絵の比較に見る共通点と変化

1. ルイス・キャロル著『不思議の国のアリス』ヤン・シュヴァンクマイエル画、
久美里美訳（東京・エスクァイアマガジンジャパン、2006）
2. Lewis Carroll, *Alice's Adventures In Wonderland,* illustrated by
Sir John Tenniel （London：Macmillan,1927）

４年　内田まどか

出版された年代が異なる上記 2 冊の『不思議の国のアリス』を用いて、比較をしていきたい。1 冊目の本の、ヤン・シュヴァンクマイエルという画家の挿絵は、実写と人形を組み合わせた独自の世界観で作られていて興味を惹かれた。2 冊目の本は、ジョン・テニエルが挿絵を描いたということが一番の理由として挙げられる。というのも、2006 年に出版されたシュヴァンクマイエル版は、ジョン・テニヘルの挿絵に深く影響を受けて作り出された書籍だからである。このことは同書に書かれている。シュヴァンクマイエルは、「本書におさめられたイラストレーションは、この本の最初の挿絵を手がけたジョン・テニエルへのオマージュです。彼が描いたいくつかのモチーフや引用を、とりわけ各章の扉にある白黒のイラストのなかに見ることができるでしょう。私にとって彼のイラストレーションは、最も温かみがあって、キャロルの文章に限りなく似つかわしいものなのです。」(p.6)というコメントから伺える。また、映像作家としての活動もしているシュヴァンクマイエルは、同書を出版する以前の 1988 年にも、ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』をもとにした『アリス』という映像作品を手がけている。これらにより、この画家が『不思議の国のアリス』という作品に、深く影響を受けた人物だということが分かるであろう。

『不思議の国のアリス』の挿絵を最初に手がけたジョン・テニエルと、シュヴァンクマイエルの挿絵の共通点はどのようなものか。また、異なる点をも探ってみたい。

共通点

アリスの表情

テニエルの手によって描かれたアリスは、顔をしかめたり驚いた表情はかすかにするものの、大きなリアクションはしておらず表情は乏しい。

シュヴァンクマイエルのアリスは、写真に収めた人形をもとに作成していることから、表情は微動だにしない。テニエルの描いたあまり人間味のないアリスが、人形を使用したシュヴァンクマイエルによってさらに生かされ、より不気味に表現されている。

変化ー挿絵と本文の関連性

テニエルの描く挿絵は、1 ページを使って大きく描かれているものもあれば、本文中に現れたりと多様である。文中に挿絵がはさまれることにより、本文の内容を視覚的にも理解し

ながら読み進めていくことができる作りになっている。また、カラーページでは淡い色を基調として描かれているため、優しい雰囲気が出ている。

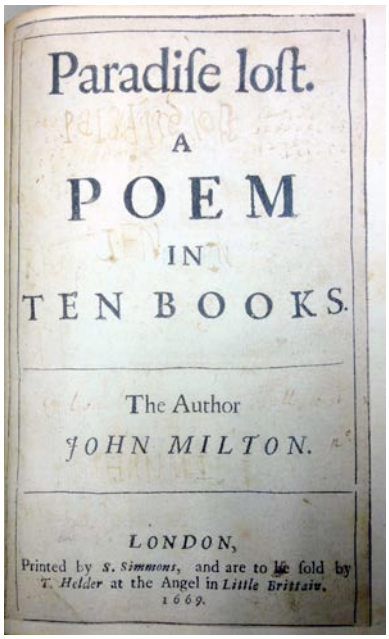
シュヴァンクマイエルの描く挿絵は 1 ページを使い、大きく書かれているもののみとなっている。色を使い華やかに描かれているため一見派手に見える。しかし部分的に色を使わずモノクロで描いていたり、部分的に小さく描かれていたりと、目立たせたい部分が際立つ構図になっている。また、人形とイラストを組み合わせた挿絵は、シュヴァンクマイエルが大学時代人形学科に所属していたことや、卒業後も人形劇場で働いていたことから影響を受けている。

テニエルの挿絵は、文章の間に挿入されていたり、本文と関連性のある挿絵が描かれていることが多い。そのため、本文があってこその挿絵だということが伺えるが、対してシュヴァンクマイエルの挿絵は本文とあまり関連性のないととれるものが多い。そのため、シュヴァンクマイエルの芸術センスを前面に押し出した挿絵となっている。

登場キャラクターの表情

2 冊の共通点として、アリスの表情が乏しいという点を上に挙げた。しかし、テニエルの描く不思議の国でアリスが出会うキャラクターは表情豊かで、いきいきと描かれていることが多い。それに対しシュヴァンクマイエルの挿絵は、アリスのみでなく登場キャラクター全てにおいて表情が乏しく、機械的なもののように見える。この相違点から伺えるのは、テニエルの描くアリスの表情が乏しいのは、不思議の国に迷い込む異質な存在だと位置づけるためになされたということである。対してシュヴァンクマイエルの挿絵は、アリスのみでなく登場キャラクター全ての表情が乏しいことから、不思議の国自体を奇妙な世界だと分かるよう演出し、キャラクター全てが異質なものに見えるような表現方法をしている。

最後に、『不思議の国のアリス』の挿絵は、多くの画家によって描かれているが、やはりテニエルの挿絵が基盤となり、現在も生かされているのだと分かった。そしてシュヴァンクマイエルもまた、テニエルの描いた挿絵に影響を受けつつも、映像作品等で培った独自の芸術センスを生かし、挿絵の概念を覆すような新しい絵本を作り上げていると感じた。



Paradiſe loſt.

A

POEM

IN

TEN BOOKS.

The Author

JOHN MILTON.

LONDON,

Printed by S. Simmons, and are to be ſold by T. Helder at the Angel in Little Brittain.

1669.

ミルトン『失楽園』1669 年版の

タイトルページ

ミルトン『失楽園』第 4 版 1688 年版

第 1 巻 口絵

And that reminds me. There's a little lesson I want to teach *you*, while we're looking at this picture of Alice and the Cat. Now don't be in a bad temper about it, my dear Child! It's a very *little* lesson indeed!

Do you see that Fox-Glove growing close to the tree? And do you know why it's called a *Fox*-Glove? Perhaps you

ルイス・キャロル『不思議の国のアリス』

著者キャロルによる手書きの自筆本の

ファクシミリ版

『地下の国のアリス』